

安部公房「けものたちは故郷をめざす」における植民地の問題

坂 堅 太

○キーワードⅡ安部公房・「けものたちは故郷をめざす」・植民地・引揚げ・ナシヨナリズム

引揚げ体験を小説化する

安部公房「けものたちは故郷をめざす」は、ハンガリー事件とその評価を巡る混乱の只中にあつた一九五七年一月、『群像』にて連載が始まった。全四回の連載を終えたのち、ほとんど期間を置くことなく、同年四月二五日には単行本としてまとめられ大日本雄弁会講談社より刊行された。

物語の梗概は以下のようなものである。満洲で生れた久木久三は早くに父を亡くし、母と二人で暮らしていた。彼が十六の年に日本が敗戦すると、それまでの生活は一変する。敗戦後の混乱の中で彼は唯一の肉親である母も亡くしてしまうのだが、その埋葬をしている間に、周囲の日本人たちは彼を置き去りにして引揚げを開始してしまう。一人取り残された日本人として途方に暮れていた久三は、進駐してきたソ連軍将校たちにより保護される。久三は二年以上、彼らと生活をともにするのだが、やがて日本へ向かうことを決意し、将校たちの下を離れて

南へ向かう列車へと乗り込む。しかし彼を乗せた列車は国内戦に巻き込まれた結果破壊され、久三は車内で知り合った高石塔という謎めいた人物とともに徒歩で南へと向かうことを余儀なくされる。零下二〇度以下ともなる荒野の中、幾度も死を覚悟しながらも、二人はどうか奉天までたどり着く。しかしそこで久三は高の裏切りに会い、所持品の殆どを奪われてしまう。窮地に陥った久三は一人の中国人少年に助けられ、日本人留用者のところへと連れて行かれるが、日本人たちは久三を助けようとはしなかった。その後久三は密貿易を行っている大兼という日本人の男に出会い、日本へと向かう密輸船に乗り込むことに成功する。しかし大兼たちは最初から久三を日本へ帰すつもりなどなく、船倉に閉じ込められた久三は日本の地を踏むことが出来ないまま作品は終わる。

興味深いのは、作家の実体験と作品とを関連付ける私小説的発想を極端に嫌ったことで知られる安部が、「けものたちは故郷をめざす」については、自身の引揚げ体験の影響を認めている点である。『新鋭文学叢書2 安部公房集』（筑摩書房、一九六〇）に寄せた自筆年譜の「昭和二十一年」の項には、「その年の暮もおしせまつてから、やっと引揚げ船に乗り込めた。上陸まぎ

わに、船内にコレラが発生し、港外に十日近くもとめられ、発狂する者まであらわれた。(このときの異常な体験が、「けものたちは故郷をめざす」の背景になっている)」という記述が見られる。

このことから、先行研究においては安部の伝記的事実と結び付けて論じるものが多い¹⁾。そうした読みの試みで繰り返し指摘されたのが、「故郷」という主題である。多くの研究に共通するのが、満洲と日本のどちらにも帰属することが出来ず両者の間で宙吊りとなる久三の姿を通じ、帰属すべき空間とされる「故郷」概念そのものの解体を読み取る、という枠組みだ。こうした先行研究で重視されるのは、日本を希求しながらも拒絶され、切り捨てられてしまう〈被害者〉としての久三の姿である。敗戦後の混乱で他の日本人に置き去りにされ、更に救いの手も差し伸べられないまま「内地」にたどり着けない久三は〈棄民〉というべき存在でもあり、確かに被害者としての側面を持っている。ただ、久三を〈棄民〉と位置付ける枠組みでは、彼と「日本」という「国家」の二項が前景化されることになり、植民地の問題が見えなくなる恐れがある。そもそも、久三を拒絶した「日本」とはいつたい何であろうか。一九四五年から一九四八年を物語内の時間として設定するこの作品においては、「日本人」「日本」という語の指し示す歴史的な意味についても考える必要がある。

ポツダム宣言受諾により「日本」は北海道、本州、四国、九州およびそれに付随する島々へと縮小することになり、それに

伴い「日本人」の境界も変更されることとなった。帝国の崩壊により生じた多様な人口移動の一つとして「日本人」の引揚げを捉える必要を述べる道場親信は、この人口移動の中で「植民地支配が急速に忘却され」「旧「帝国」の忘れ形見である旧植民地出身者を排除・不可視化していった」結果、「単一民族国家」の表象が作り上げられたことを指摘している²⁾。

敗戦により植民地を喪失した結果、「日本人」は新たに規定された境界により画定され、植民地出身者は「非日本人」として「国民」の空間から排除され、「日本」と「日本人」がびつたり重なったかのような表象³⁾が流布していく。引揚げとはこうした脱植民地化の一過程であり、単純な〈帰郷〉ではなかったのである。「植民者としての「日本人」が敗戦の事態のなかで「特権」を失い、収容経験をするなど被占領の立場に逆転するなかで、マジヨリティであり、非対称的関係の優位に立つがゆえに意識しなくてすんだ「日本人」意識を、引揚者たちはさまざまに意識せざるを得な⁴⁾かったのであり、その意味で引揚げとは「本来はトランスナショナルであったはずの体験」だったのだ。

「けものたちは故郷をめざす」に「故郷」概念の解体を読み込んできた先行研究では、「日本」から切り離される久三の姿を重視する一方で、彼の生まれ育った巴哈林という街については、それが「内地」ではなく、敗戦により二度と帰ることのできない場所となった、という意味しか与えられてこなかった。

巴哈林が植民地であったこと、つまり久三が「植民者としての「日本人」であったことの意味は重視されておらず、本来は引揚げと分離不可能なはずの植民地支配の問題について十分に考察されてきたとは言いがたい。

「けものたちは故郷をめざす」を植民地支配と脱植民地化の問題、そして「日本」というナショナル리티の問い直しと結び付けて読み直す際には、作中に様々に描かれる他民族との接触が重要となってくる。というのも、他民族からの眼差しは、戦後「日本」が脱ぎ捨てようとした「多民族帝国の過去」、その責任を久三に鋭く問いかけるからだ。

以上を踏まえ、本論文では久三の生れた巴哈林という街が植民地都市であったことを重視し、植民地支配の体験、そして道中で出会う他民族の存在が「日本人」という彼のナショナル・アイデンティティにどのような影響を与えているのかを考察していく。

巴哈林という植民地都市

この作品が一般的な引揚げの〈帰郷〉物語と異なっているのは、先行研究が指摘してきたように、そもそも久三にとつての「故郷」が明確ではない、という点によるところが大きい。「引揚げを体験するためには、(植民先の現地に)出かけるという行為が先行するが、敗戦後の引揚げを論ずるときには、その往還の

安部公房「けものたちは故郷をめざす」における植民地の問題

「還」しか扱われないことが多い」と成田は指摘しているが、久三は植民者二世であり、彼個人の次元では「日本」への移動はそもそも「還」とはなりえない。生まれ育った巴哈林は「塙の落書の一つ一つでさえすぐに思い出せる」ような、そこから離れる際には「二十年間をもぎとられる肉体的な痛み」すら覚える場所であるのに対し、「日本」については「富士山、日本三景、海にかこまれた、緑色の微笑の島」などの「学校の教科書から想像しているだけ」の空虚なイメージしか持ちあわせていない。久三の〈移動〉は本来であれば〈故郷から異郷へ〉向かうものであるのだが、「日本に帰りたいという気持」とあるように、久三は未踏の地であるはずの「日本」を帰るべき場所、帰属すべき空間であると認めている。空疎なイメージでしかない「日本」を「故郷」であると思いこむことにより、久三は自分の行為を〈帰郷〉へと偽装しているのである。

ただ、この巴哈林・「日本」という二つの空間は、作品後半に描かれる久三の夢の中で次のように同一化している。

日本海の夢をみていた。海は小川ほどの大ききさしかなかつた。向う岸に山があり、山ひだに町が見えていた。それは彼を置き去りにし、追い出した、巴哈林の町にそっくりだった。巴哈林がそのまま、引越していつたようでさえあつた。海がこんなに狭いものなら、そんなことも可能だったかもしれない。たどりつきたさに、胸がうずいた。しかし、とび越すには、すこし幅がひろすぎる。苛立つて、久

三は拳をふりあげ歯をむいてわめいた。

ここでは〈故郷／異郷〉という差異は消滅してしまっているのだが、そもそも、植民地都市である巴哈林が「日本海」の向うに見いだされる、とはどういうことなのか。久三にとって巴哈林とはどのような空間として認識されていたのか。そしてそれは、「日本」を「帰る」ところと想い描く久三の帰属意識とどのように関係しているのか。

巴哈林という都市の空間構造については、物語序盤で久三がソ連兵の下から脱出し駅へと向う際、次のように記述されている。行く手にぼつんと一つ常夜燈がみえてきた。そこに目指す橋がある。旧市街と、パルプ工場のためにあらたに日本人が建設した新市街とを結ぶ橋である。(中略) 一気に橋を駆けぬけた。乾いた足音がひびきわたった。(中略) 渡りきると、すぐ左に折れた。材木置場があつた。ここまでくれば安心だ。旧市街の道は迷路である。(中略) 材木置場をぬけ、右に折れ、小さな鋳物工場の裏をとおり、屑屋の仕切場を横切り、四五軒並んでいる棺桶屋のまえから、木賃宿横丁に入る。(中略) 昔はこの道が南と北とを結ぶ幹線道路であつたらしい。町で一番古い部分であり、同時に今では一番さびれた部分でもあつた。

日本のパルプ産業は日中戦争勃発後、政府の手厚い保護のもとに国策産業として発展したが、それを支えたのは資源供給地としての満洲地域だった。「旧市街」と「パルプ工場のために

あらたに日本人が建設した新市街」とに截然と分けられている巴哈林という街の構造は典型的な植民地都市のそれであり、日本人による植民地収奪を示すように、旧市街にある「かつての幹線道路」は「木賃宿横丁」として「今では一番さびれた部分」となっている。そして「新市街」は「堀の落書の一つ一つでさえすぐに思い出せる」ほど知り尽くしたものとされているのに対し、「旧市街の道は迷路」だとされているように、「パルプ工場の寮に住んでいた久三にとって、愛着のある空間が「新市街」であることは明らかである。では、こうした植民地的な二面性を持つ巴哈林という都市で、久三はどのように暮らしてきたのか。

久三の父は巴哈林にパルプ工場が新設されるのを機に満洲に渡つたとされているが、それ以前の経歴については明確ではない。当時の新聞記事によれば「パルプ事業は総てにおいて経験の技術者を要する関係上満人職工は全然使用不可能であり、従つて邦人技術者は内地に比べて優遇せねばなら」なかつたようだが、久三の父は「技師」ではなくそれについていった「木工職人」に過ぎなかつた。そして久三が生れて間もなく父は死んでしまうのだが、「母には帰る家がなかつたため」日本に帰ることも出来ず、工場長により紹介された寮母としての収入を頼りに母子二人で暮らしていかざるをえなかつた。素性がはっきりせず、父もない久三は、巴哈林の日本人社会でも下位の階層にいたはずだ。一方で、「十三の年にT市に日本人の中学が

できると、母はすぐに彼を進学させた」とあるように、母一人の収入にもかかわらず家計はそれほど窮迫していなかったことも伺える。この「つつましくはあるが、希望に満ちた年月」を支えていたのは、「かつての幹線道路」を「一番さびれた部分」へと追いやった植民地収奪だったことは言うまでもないだろう。たとえ下層であっても、日本人社会の一部であるというだけで彼等は支配階層の特権に浴することが出来た。

そして敗戦を迎え、他の日本人たちが進攻してくるソ連軍への対応に混乱しているさなか、久三は誰もいなくなった寮の中を歩きながら次のような感慨を抱いている。

いま彼をとらえているのは、不思議に甘い解放感なのである。彼は中学に上り、成績さえ十分ならさらに上級の学校にも入れてもらえるはずだった。汽車で二時間半ほど北に行けば昂昂溪である。そこで本線にのりかえれば、ハルピンまで半日とかからない。ハルピンには日本人の工業専門学校があつた。今年の学期はじめの進学調査表には、彼はその学校の名前を書きこんだものである。見返してやるんだよ、というのが母の口ぐせだった。久三は母にとつて、素性の知れない身分から抜けだすための、希望をかけた戦士だったのである。しぜん彼にとつてはあらゆるものが堅固な城塞に見えていた。そして無意識のうちに、その負わされた任務を憎んでいたのかもしれない。いま彼が足もとにふんでいるのは、その城塞が無残に崩れさつた廢墟のあ

とだったのである。

「見返してやるんだよ、というのが母の口ぐせだった」とあるように、母一人の収入に頼る家計状況の中でも久三に進学の機会が与えられたのは、母にとつては彼が「素性の知れない身分から抜けだすための、希望をかけた戦士だった」からであり母は久三を介して〈立身出世〉を図ろうとしたのである。作田啓一は立身出世主義を日本社会における適応・同調の形態として位置づけ、そこには「共同生活の秩序に全面的にコミットメントしようとする動機づけ」が存在すると指摘している⁸⁾。五族協和というスローガンとは裏腹に満洲国では日本人による他民族への差別が日常化しており、「民族の坩堝」であつた満洲国で、日本人はほとんど他の民族と交わり合うことなく、棲み分けて生活していた⁹⁾。こと、「在満日本人が日本国内と同じ生活にこだわつたこと」はよく知られている¹⁰⁾。満洲の日本人たちはその支配秩序を維持するためにも〈日本人らしく〉振舞うことを意識していたのだが、「日本人の中学」、「日本人の工業専門学校」へと息子を進学させようとする母の行動は、まさにこうした在満日本人社会の規範に沿うものであつたといつてよい。だが、こうした母からの期待は「負わされた任務」として久三に重くのしかかることになる。立身出世を望まれば望まれるほど、彼は自身が「素性の知れない身分」、つまり「新市街」における周縁的存在であると意識せざるをえない¹¹⁾。

このように、巴哈林の日本人社会から疎外されていたからこ

そ、他の日本人たちが右往左往しているさなか、久三は「不思議な甘い解放感」を覚えるのである。敗戦により満洲国は瓦解し、自らを周縁化してきた「新市街」もまた「廃墟」となった。母の期待や「素性の知れない身分」ゆえのコンプレックスからも解放され、「なにも彼もが、すっかり平等になってしまった」と感じたのである。

しかし、この「不思議な甘い解放感」はすぐに消え去ってしまい、久三は「取り残された不安に身をしめつけられる」。そしてこの不安を紛らわそうと彼がとった行動は、「静岡市のある町」から送られた、「現場の係長」である「幸子の父にあって同姓の差出人の手紙」を懐にしまう、というものだった¹²⁾。この手紙は内地とのつながりを示すものであり、「両親は、両方ともあまり素性がつきりしていない」久三には決して届かなかったものである。それを懐にしまうという行為は、敗戦前に抱いていた「素性の知れない身分」という負い目から彼が逃れられていないことを意味している。「幸子の父にあって同姓の差出人の手紙」を懐にしまうことでわずかも内地との繋がりを手に入れようとする久三にとって、「日本人」だけが住む「日本」へたどり着くことは「素性の知れない身分」からの脱出を意味しており、戦前の〈立身出世〉を反復するものであると言える。

他民族から「日本人」と眼差されること

久三は巴哈林の日本人社会で「素性の知れない身分」として周縁化され、模範的な〈日本人〉となるよう願う母の期待を背負われてきた。彼は自らを取り囲むものに対する憎悪さえ抱いていたのだが、敗戦によりそうした秩序が崩壊すると今度は自らその秩序に進んで没入し、「学校の教科書から想像しているだけ」の空虚なイメージしか持たない「日本」内地に固執する。このように久三の引揚げが戦前の〈立身出世〉の反復という性質を持つと考えると、彼の認識は本質的に敗戦前から変化していないことがわかる。「新市街」が「廃墟」となってしまったことを久三は自覚している。しかしその「廃墟」を前にして、彼は新たな認識を作り上げるのではなく過去に回帰することを選んだのだ。

だが、敗戦による満洲国の崩壊は、それまでの支配／被支配の関係の逆転をもたらすものでもあった。殆どの引揚げ体験者の手記に記される他民族からの暴力はそれを象徴するものである。久三はこうした暴力に直接さらされることはないものの、「荷車をひきリユックをかついで行進してくる汗だらけの日本人の一群」につきまとう「十人ばかりの屈強な中国人の男たち」や、『東北人的東北（東北人のための東北）』というピラを貼りつけてまわる中国人の青年を目撃している。しかし久三がその

意味を十分に認識していたとはい難い。そもそも、彼は敗戦後の状況を「なにも彼もが、すっかり平等になつてしまつた」と捉えているのだが、この「平等」は「新市街」内部に限定されたものに過ぎない。巴哈林という街全体で見たときには、「新市街」と「旧市街」の関係、つまり民族間の支配／被支配関係の逆転が存在していた。その想像力が「新市街」の外部に広がる状況にまで至らないということは、巴哈林の植民地都市的性格に対する久三の無関心を示している。「つつましくはあるが、希望に満ちた年月」の根底には「旧市街」に暮らす人びとへの抑圧が存在していたことを意識しない久三は、「日本人」であることの意味が敗戦前と後では決定的に変化してしまつてゐることを理解できていない。例えば、久三が南行きの列車に乗り込む際、ソ連兵のはからいで特別旅行者証明書を発行される場面で次のような描写がある。

「特別旅行者証明書です。」とわきにいた八路軍将校が思いがけないあざやかな日本語で説明した。(中略)二年ぶりに聞いた日本語である。久三は思わずたずねた。「日本人ですか?」／「朝鮮人です。」と相手は無愛想こたえた。

ここで日本語話者と「日本人」とを同義のものとして結び付ける久三の短絡さは、満洲地域の政治的・歴史的背景に対する鈍感さを表しているが、それ以上に重要なのは「朝鮮人です」と「無愛想に」こたえる将校であろう。「あざやかな日本語」を話す彼は、敗戦前までは「日本人」であつたかも知れない。そして

安部公房「げものたちは故郷をめざす」における植民地の問題

だからこそ、一九四八年になつてもなお「日本人」であることを押し付けようとする久三に苛立ちを覚えたと考えられることもできる。しかし久三は、将校の「無愛想」の意味を理解できない。この「日本語」を巡る問題は、他の場面でも描かれている。それは久三が高と出会う場面である。

「日本人だな。そうだろうと思つていた。」と外のほうに目をくばりながら低い乾いた声でさざやいた。いかにも軽い日本語だつた。あらためて見なおすと、男の顔に日本人の輪郭が浮び出てくる。／「あんたですか?」と久三もついつらられて囁き声になつた。／「いや、おれは中国人だね。」と赤地の襟バッジをたたいてみせ、「通信工作員だから、いろんな言葉を話せるよ。(中略)しかし、あんまり大きな声で日本語をつかわんがいいよ。いまは抗日反帝だからな。」(中略)「でも日本語、すぐくうまいなあ。」／「おふくろが、日本人だつたからな。」／「じゃあ、半分は日本人なんですね。」と久三は毛布の中で両手をもみ合わせた。こども久三は日本語話者を「日本人」と同一視し、「中国人」と答える相手に「半分は日本人」であることを押し付ける。そして高の言うように、敗戦まで支配者の言語であつた「日本語」は、敗戦後の「抗日反帝」の状況では「あまり大きい声で」「つかわんがいい」ものとなつたのだが、久三がそうした変化を意識することはない。敗戦後の満洲において無頓着に「日本語」を用いる場面はその後にもある。奉天の市場で大兼を見つ

けた久三は「ねえ、日本人なんだから、小父さん、日本人なんだから」と呼びかけるが、大兼は「おさえた声で」、「馬鹿つたれ、よせて言ってるじゃねえか！日本人だと分つたら、殺されちゃうんだぞ。でっかい声して、しゃべくりやがってさ」と、久三の振る舞いを批判する。大兼は敗戦により「日本人」が支配者の地位から転落したことを理解しているからこそ、「おさえた声で」日本語を話している。しかし久三は一度高にそのことを咎められているにもかかわらず、「でっかい声」で日本語を話してしまう。久三は「日本人」というナショナル・アイデンティティを信頼して大兼に話しかけるのだが、その「日本人」が敗戦後の旧満洲地域でどのような存在として見られているか、については全く意識の外にある。

しかし、奉天の「日僑留用者住宅」に住む日本人たちは「気の毒だと思っても、ぼくらにはなんの力もない」と冷たく久三をあしらひ、その子どもたちは「日本人があんなに黒い顔をしているもんか」と、久三を「日本人」から切断する。久三の承認欲求は満たされない。先行研究ではこうした久三の〈棄民〉的な性格に焦点が当てられていたが、「日本人」からの承認が得られないからといって、久三が「日本人」ではない、ということにはならない。実際、ソ連軍の将校や馬車に乗った中国人の青年など、他民族の人物は久三を「日本人」であると認めている。「日本人」からは同胞と認められない久三の主観的立場に立てば、彼のナショナル・アイデンティティは否定されたこ

とになる。しかし主観的な次元において民族意識が否定されることと、客観的な次元における民族集団への帰属が否定されることは同義ではない。

「日本」から見捨てられたという〈棄民〉的側面にばかり焦点化してきた先行研究ではこの点が捨象され続けてきたが、他民族からみれば、久三はまぎれもなく「日本人」なのである。そしてこの他民族からの視線は、久三に植民地支配の問題を鋭く問いかけることになる。

それが最も明確に示されるのが、奉天で出会った中国人少年との関係においてである。久三は当初、公園で暮らす浮浪児に對し社会から疎外された者同士の親近感を覚え、「ごく親しい間柄になれそうな気持」を抱いていた。そして久三が高に所持金などをすべて奪われたところを救ってくれるのもこの少年なのだ。両者が始めて交わす会話は次のようなものだった。

「おまえ、日本の鬼野郎だな！」そう言うなり、犬殺しの少年が足をのぼして、久三の頭を蹴った。久三は相手の親切にどう感謝しようかと思っていただけに、おどろいてしまう。しかし敵意は感じなかった。塔からのぞいたときの友情らしいものが、そのままつづいていた。ちよつとした誤解にもとづく仲間喧嘩なのだと思いたかった。

「日本の鬼野郎」という呼び方が示すように、少年にとつて久三は植民地支配民族の一人に他ならず、その視線には激しい憎悪が込められている。だが「植民者としての「日本人」」で

あつたことを意識できていない久三は、彼の怒りの意味を理解できない。それどころか、少年に対して一方的な「友情」、社会から疎外された者同士の連帯感すら求めようとしている。それ故少年の怒りを「誤解」としてやり過ごそうとするのだが、語り手は久三のこの認識が誤りであることを読者に明示している。

犬殺しの少年は怒るだろうか。日本人から追い出されたと言つても、許してくれないだろうか？（中略）どんなことでも手伝うよ。なんなら、自分日本に帰れなくても、仕方がないさ。誤解さえとけりや、おれと君とは、気が合うと思うんだ……だが、どんな誤解？……久三には、少年と自分をへだてているものが何人であるか、やはりよく飲み込んではいなかった。誤解などと言つてはすまずことのできない、もつと大きなへだたりであるような気もしていた。

久三と少年を隔てている旧支配者／旧被支配者という民族間の壁は「誤解などと言つてはすまずことのできない」もの、「大きなへだたり」として立ちふさがっている。久三を被害者のな位置に置いてきた先行研究では、この少年との関係について言及されることはなかった。だが「日本」から見捨てられた存在であろうと、彼はあくまで「新市街」の一員でもあつたということを確認しなければ、「日本の鬼野郎」と叫ぶ少年の憎悪を正しく位置づけることは出来ないし、また、彼の憎悪を「誤解」としてやり過ごそうとした久三の認識を批判することも出来ない。

久三は結局少年との間にある「大きなへだたり」を認識する

安部公房「げものたちは故郷をめざす」における植民地の問題

ことはなく、自身の依拠するナショナリズムの相対化に踏み出すことはない。しかし一度だけ、その萌芽のようなものを意識する場面がある。

「もうすぐだよ、ここから先は、一人で行きな……行つたら、あそこには、もう二度と来るんじゃないぜ。今度、あの辺でうろろしているのを見つけたら、ただじやすまないからな……犬つころと、おんなじさ……」（中略）ちがうんだ、ちがうんだ、と久三は心の中で繰返した。（中略）久三はひどく心細い、泣きたいような気持ちになる。ちくしよう、チャンコロめ！そう口の中で言つてみたが、ぜんぜんいまの感情にはそぐわなかつた。ちがうんだ、ちがうんだ、と繰返しながら、教えられた道を足をひきずつて歩きます。しかしすぐに、日本人のところに行きつけるのだという希望と、本当にそんなところがあるのだろうかという不安とが、その苦い気持にうちかつていた。

敗戦後もなお「植民者」の意識を相対化出来ない久三は「チャンコロ」という差別語しか出てこない。その言葉が自身の感情にそぐわないことを意識しているものの、他に言葉を見つけないままに久三は少年と別れている。この違和感は結局「日本」への期待、つまり植民地支配者としての民族意識により見失われてしまう。しかしこの時、彼は自らの認識枠組の限界に確かに直面しており、何故そのような差別語しか出てこないのかという問いによって、少年との間にある

「大きなへだたり」、両者の間に引かれた境界の存在を理解し、新しい認識へと踏み出す可能性が生れている。

久三が直面した、「チャンコロ」という言葉しか持たない既存の意識の限界は、民族的他者である少年との境界の上で発見されている。そこに胚胎しているのは、「日本の鬼野郎」という憎悪への応答から立ち上げられる民族意識の可能性、〈限界〉Ⅱ〈境界〉との対決から形成されるナシヨナリズムの可能性である。

ナシヨナリズムの更新

一九五〇年代に登場した「帰郷」の物語としての引揚げ体験記は、戦争の犠牲となった一般国民という引揚げ者表象を産出し、植民地責任の問題を忘却する想像力を日本国民に付与する役割を果たした。ナシヨナリズムの自明性を突き崩すトランスナショナルな事象であったはずの引揚げは、「国民」の枠組みを補強するメロドラマとして流通することとなった。そうした先行する引揚げ表象群に対し、安部が描いた〈未完〉の引揚げ譚は、「帰郷」を支える民族意識の無根拠性とその排他性を指摘し、引揚げという事象を「国民」の物語として消費するような想像力に対する批判的機能を果たすものとなった。とはいえ、そこではナシヨナリズム全般の否定、「日本」という共同体の全面的な解体が目指されていたわけではない。何故なら

「日本民族」という集団自体を否定することは、植民地支配の責任の所在までも曖昧にしてしまい、結果的にメロドラマ的な引揚げ表象と同様、植民地の記憶を忘却することになりかねないからである。

「けものたちは故郷をめざす」で目論まれているのは、ナシヨナリズムの全面的な否定ではなく、その質的な転換である。〈日本人〉という共同性を無批判に自明視し、同質性を基盤に成立する旧来のものにかわる、新たなナシヨナリズムの可能性がそこでは追求されている。それは他民族との接触・対立から浮かび上がる〈境界〉への意識から生まれるものであり、同質性ではなく差異に基づいて立ち上げられる。そして安部はその具体的な他者を、植民地支配の記憶から引き出したのである。

【註】

- (1) 長田弘「失われた地図」『解釈と鑑賞』一九六九・九、吉田潤生「けものたちは故郷をめざす」、『解釈と鑑賞』一九七一・一、栗坪良樹「けものたちは故郷をめざす」〈境界線上〉の衝動」、『解釈と教材の研究』一九七二・九、鶴田欣也「けものたちは故郷をめざす」におけるアンビバレンス」、『日本近代文学』第二〇集、一九七四・五、川村湊「異郷の昭和文学」(岩波新書、一九九〇)、小林治「安部公房「けものたちは故郷をめざす」について」『満州体験の対象化をめぐる』、『駒沢短大国文』一九九五・三)など。
- (2) 道場親信「菊と刀」と東アジア冷戦 あるいは「日本文化論」のバージョン 下「現代思想」二〇〇三・九。
- (3) 道場親信「戦後開拓と農民闘争 社会運動の中の「難民」体験」(『現代思想』二〇〇二・一一)。
- (4) 成田龍一「引揚げ」に関する序章「『思想』二〇〇三・一一)。

(5) 同右。

(6) 日本経営研究所編『製紙業の一〇〇年』（王子製紙・十条製紙・本州製紙、一九七三）。

(7) 田上學『満洲のバルブ企業 内地より条件劣る』（『満洲日日新聞』一九三八・五・一四）。

(8) 作田啓一『価値の社会学』（岩波書店、一九七二）。

(9) 山室信一『キメラ―満洲国の肖像 増補版』（中公新書、二〇〇四）。

(10) 塚瀬進『満洲の日本人』（吉川弘文館、二〇〇四）。

(11) この箇所で用いられている「城塞」という語について、鶴田欣也は「城塞というのは、厚い壁で出来たものであるが、久三は故郷に居りながら、絶えず壁の外に立たされているという感情を持っていたことになる」と指摘している（前掲）。「けものたちは故郷をめざす」におけるアンビバレンス）。

(12) この「幸子」という人物について、『群像』初出時では「林田幸子―《巴哈林高女三年・十五歳・國戚長女・本籍地静岡県……》」という説明がつけられており、「内地」に「本籍地」を持たない久三との対比がより強調されていた。

付記 「けものたちは故郷をめざす」の本文引用は全て初刊本に拠る。引用の際、旧字は新字に改め、ルビや傍点等は適宜省略した。

本稿は日本近代文学会東海支部第五四回研究集会（二〇一五・一二・一九、於東海学園大学）における口頭発表に基づく。会場の内外で貴重なご教示を賜ったことに感謝申し上げます。

「さか けんた 本学教員」